



女の居場所

津村節子

海竜社

女の居場所

定価 1,100円

昭和六十二年四月二十四日 第一刷発行

著者 津村節子

発行者 下村のぶ子

株式会社 海龍社

東京都中央区築地二ノ九ノ二（郵便番号）一〇四

電話 東京（〇三）五四二一九六七一 振替 東京一一四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとり
かえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所 白陽舎印刷工業株式会社（福）

製本所 大口製本印刷株式会社

© 1987, Setsuko Tsumura, Printed in Japan

ISBN4-7593-0175-5 C0095 ¥1200E

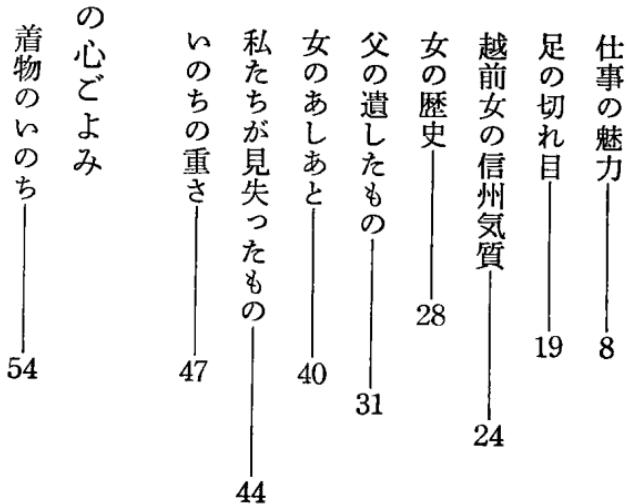
目
次

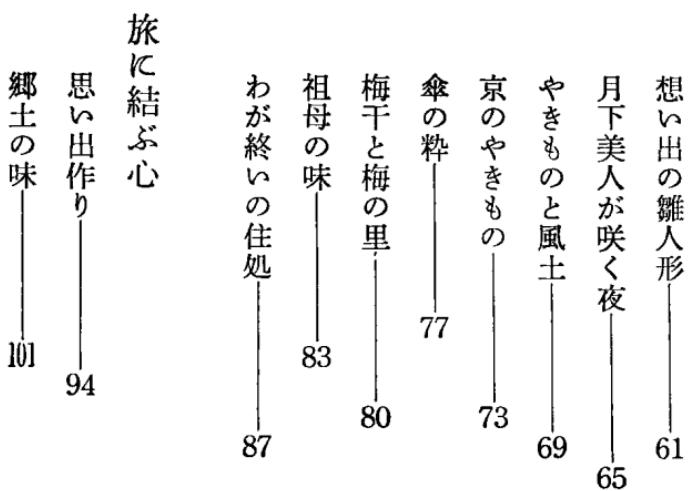
女の居場所

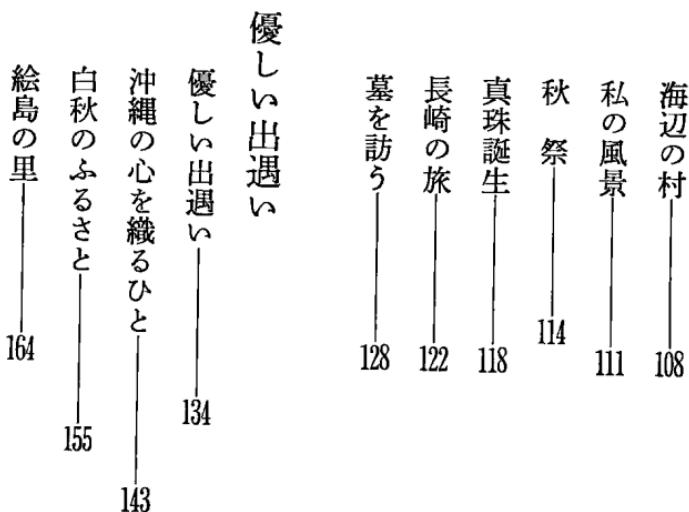
〒550 大阪市西区江戸堀2-3-4
-0002 古金一郎方
S.U.中国へ本を送る会本部
(大阪花甲協会贈書会)
電話06-441-4397

98.11.26

女の居場所







やさしい巨人	167
銀座の女	170
愛のかたち	

無垢の愛の世界

出遇いと別れ

178

人間らしく生きる

191

下町の女の哀惜

213

217

あとがき

220

ブックデザイン——田中淑恵
装画(型染)——伊藤純夫

女の居場所

仕事の魅力

小説を書くことは出産に似ている

流行作家にはほど遠いが、二十年間小説を書いていると、何を書いたらいいかほとほと思いあぐねことがある。商業雑誌に書く以前は、十五年間同人雑誌に参加していったわけで、その期間を加えれば、長篇を二十篇ほど、短篇は百六十篇ほど書いていることになる。初めの頃こそ、書きたいことがあり過ぎて、筆が伴わないのもどかしかつたが、職業作家になれば締切や枚数が決められ、必ずしもその時ちょうど書きたいテーマがあるわけではない。

引き受けはしたものの、いくら考えても考え方かず、締切は容赦なく迫つてくる。昼は溜息ばかり、夜は眠れず思わずうなり声をあげるようになる。同じく小説を書いている夫のうなり声で目を覚ますこともあります、こんな場合お互いどうしようもなく、ただじつとし

ているだけだ。

出産予定日を相当日数過ぎた場合、陣痛促進剤を点滴して、人工的に陣痛を起し、出産させることが行われているようだが、点滴で作品が出来たらどんなに助かるかしれない。

だが、今朝たまたま見たテレビでは、こうした医療的必要性からばかりでなく、一年中昼夜を通じてある出産を、ウイークデイの日中に出産させるために計画的に促進剤が用いられていることを知つた。これを積極的に取り入れている医師は、出産というものは順調な経過をたどつても思いがけない突発的な危険状態におちいることがあり、そのためにはベテランのスタッフが揃っている時間帯に産ませるのが安全だ、という考えをのべていた。

が、促進剤が適量でなかつたり、使用中の観察が行き届かなかつたりして子宮が破裂し、産婦が死亡したり、赤ちゃんが脳性麻痺になつたりという事故も起つてゐるという。

母子共に異常なく出産が終つても、胎児に全く何の影響も及ぼさないということはないだろうと、恐ろしい気がした。

小説を書くといふのは出産によく似てゐる。

十ヵ月、母親の胎内で胎児が成長している期間は、テーマが決まって取材したり、資料

を調べたりして、構想をねり、発酵させている期間で、いざ筆をとつて書いている期間よりも概ね長いし、書けなくて無意識にうなつて自分の声に気づくと、陣痛を思い浮べてしまう。

優秀な助産婦さんに助けられて

私の出産の場合、長男の時は都心の著名な産院に入院したが、長女は長篇を書き上げてしまおう、と無理をしたのがたたつて早産だつたため、病院に行くのが間に合わず、近くの助産婦さんに取り上げて貰つた。

産院では、陣痛の間隔がかなり短くなつて病室から産室へ移されたが、看護婦さんが時時様子を見に来るだけで、出産間際まで誰もいない部屋のベッドに置かれていた。出産時には、医師や看護婦さんらが何人も周囲にいたようだが、ひどく孤独で、心細かつた。

それにひきかえ、わが家に駆けつけて來た小太りの中年の助産婦さんは、自分の手を私につかませ、掛け声をかけて励まし、苦しい時は一緒にうなり、無事出産を終えたときは暑い季節でもないのに汗みずくになつていた。

疲れ切つた産婦を、偉かつた、偉かつた、とねぎらい、未熟児で皺だらけの赤ん坊を、

可愛いきれいなお嬢ちゃんだ、と褒めちぎった。手術が必要な異常が生じた時は、設備やスタッフの整った病院で出産するのが安心だが、産院でお世話になつた方たちの顔は覚えていないのに、一緒になつてうなつたり、汗みずくなつて産ませてくれた助産婦さんの顔は、今でも忘れない。

小説を書く時の助産婦にあたるのが編集者で、作家たちはどれほど編集者を頼りに思つてゐるかしれない。怠惰で、自信のない私は、タイミングのいい催促や、熱心な励ましや、適切なアドバイスなどを心頼みに今日まで書いてきた。

書いている時は、担当者の顔しか浮ばない。雑誌に書いているのでも、出版社に書いているのでもなく、担当者のために書くのである。子供っぽいと笑われるだろうが、担当者に褒めて貰いたくて書くのである。掛け声をかけ、一緒に汗を流してくれた編集者に、喜んで貰いたいと思つて書くのである。

長篇の連載になると、二人三脚のような感が深くなる。だから、人事異動などで担当者が変るのが一番困る。

陣痛促進剤のように、誰が点滴を行つても、出産がうながされるというわけにはいかないのだ。

定年のない仕事

商業誌には締切があつて、一旦引き受けたからには乏しい才能を振りしぼつて書かなくてはならないのがつらいと書いたが、締切のない同人雑誌は、書こうが書くまいが本人の意志次第で、書かなくても、誰も文句を言う人がないのだから、怠惰になればとめどなく怠惰に流れるのが恐ろしい。

くじける気持を叱咤激励してふるい立たせてくれる編集者もいないし、漸く書き上げて活字にしても、誰の目に触れるかわからない。

まれに、同人雑誌評で取り上げられても、全国に数え切れぬほどの同人雑誌があり、その程度の力量の人はいくらでもいる。書いても書いても認められず、夫は、壇の中に手紙を入れて海に流すようなものだ、と言うが、壇の手紙はいつか人に拾われることもある。私は波打際の砂地に文字を書いているような空しさに屢々おちいつた。

いま、三十年若返らせてやると言われても、私はやはり小説を書くだろうし、もう一度あれを繰り返すくらいなら、若返らせて貰わないほうがいい。

サラリーマンの定年が延びているが、それでもそろそろ友人や友人の夫たちに定年を迎

える人が出てきた。大概再就職して、数年勤めるようだが、やがてはそれも終る時がくる。

作家は定年がなくていいと言われる。現に定年を遥かに過ぎた年で、意欲的な仕事をしている作家が多い。男性よりも女性のほうが寿命が長いこともあってか、女流作家は更に元気である。野上彌生子氏の九十九歳は異例としても、私など女流文学者会へ行けばまだ若手のほうで、後輩よりも先輩のほうがずっと多いのである。

定年がないということはいいことのようだが、これから死ぬまで書き続けるのは大変だ、と思うようになつた。

定年退職なら自分でも気持にきりがつき、世間でも認めるが、作家の場合死ぬまで作家だから、こんなに寿命が延びると頭も体力も衰えるのは必定で、それに、やはり書くことがなくなるのが不安でならない。

私の引き出し

小説は、誰にでも自分のことを一作は書けるというが、一人の人間が体験することには限りがあり、私小説を書いていたのでは忽ち行き詰る。フィクションを書くには、常にアンテナを張つていなければならぬ。アンテナに触れたことは、小説になるかならないか、

その段階ではわからないが、メモをしておかないと、私などは記憶力が乏しいからすぐ忘れてしまう。

外出先でふと思いついたら、手帳を持つていないときはレストランならレシートに、料理屋なら箸袋に、喫茶店なら紙ナプキンやマッチなどに書きとめておく。

すっかりそのことを忘れていて、二、三日してからハンドバッグの中のメモに気づくことがあるが、それを改めていつも使っている予定表の一一番後のページに書き込んでおく。それが私の引き出しである。

予定表は、多くの作家が愛用している浅草の原稿用紙屋さんが毎年お年賀にくれるもので、その店の原稿用紙を使うようになって十六年経つから、机の上の本立てには十六冊の予定表が立ててあり、その最後のページにはそれぞれ十から二十ぐらいのヒントが書いてある。

書きとめてはおいたが、創作意欲の全く湧かないものもあり、その中のいくつかが作品化されるが、その年には書かなくても、気にかかっているものは翌年また予定表の終りに書き込んでおく。一向に熟してこないものは、毎年新しい予定表が届く度に書き継いでゆくのである。